

幼稚園における自発的遊びの質向上のための保育の在り方 ～4歳児（年中組）における計画的活動の効果を中心に～

雑司ヶ谷学院 雑司ヶ谷幼稚園

松田 彌生

他3名

はじめに

1 本研究への取り組みの経過 ～保育への課題意識～

平成元年の教育要領改訂以来、わが国では環境を通しての遊びによる教育が基本とされている。

現代の都市環境において、真の遊びのなかで人格形成の基礎を養うために用意すべき環境、保育形態、保育者と子どもの関係、保育者の援助はどうあるべきか、課題を感じながら保育を行ってきた。現在は子ども主体の自発的遊びの展開による保育が望ましいとされながら、一方で、学校教育の基礎となる能力を養う、集団活動への適応を図るなどのための教師主導のクラス一斉の保育が保護者には受け入れられている実態がある。一方で現代社会はAI化が進行し、子どもの生活もバーチャルな世界が身近になり、子どもの現代社会への適応の必要性から教育内容が多くなり、将来の学習のための基礎能力や体験が重視されてきている。しかし、真に「生きる力の基礎」としては「人間としてのありよう（人間関係）」「身体の運動的、感覚的機能」が重要と考えられる。なかでも、自分の身体、感覚器官で感じる、生身の自分に根差して物や人と積極的に関わり、具体的に向き合いながら、自分自身で生きる力の基礎を培うことを一層意識的に行うことの重要性は高まっていると考える。

子どもを育てることにかかわる活動、生活は、大人も子どもも身体水準の行為を根幹とするので、言語で割り切る、また分割して教育することは適当ではないことは明らかである。幼児教育は幼児にふさわしい活動状況を形成し、子どもがその状況において自発的に自分自身を丸ごと出して身体活動をして人と関わり合う、遊びの要素を備えながら子どもの総合的な発達をはかることが重要であると考えて実践に取り組んでいる。

2 本園での教育実践の重点と課題

これまでの園内研修等から以下のことの重要性を確認して教育実践で大切にしてきた。

以下の3種の方法がとられているが、相互の関連、それぞれの活動の生かし方の検討が課題である。

① 子どもの自己の育ちを大切に、主体的な遊びの生活を中心とする。

子どもが自ら選んだ活動が認められ受け入れられることによって、自己追求から生まれる自信を育てる。子ども自身の興味関心から生まれた活動の尊重（感じる・かかわる・応答）。仲間と共に幼児期にふさわしい興味関心に基づく経験（失敗 - 成功、興味の共有など）。

指導の意図・方法 子どもの遊びへの保育者の介入は必要性が高い時に限り、基本的に子どもが環境と出会って自分ないし友達との関係の中で発生した活動を自ら展開することに任せる。保育者は見守ることが主となり、子どもの遊びを誘導、遊びの提案は子ども自らの望んでいる活動の方向に添い、先を自分たちで展開できるための橋渡しとして行う。遊びは特定の目的を持たない環境との心身の全体的融

合体験と考えられている。困難に出会ったときは、自分で解決するように励まし、助言をする。また、本人たちの目的達成のために必要な材料や方法については、よりよく活動が持続するように正しい方法を教えたり共に行う。

② 個々の心身の育ちの可能性と子ども同士の関係性を深めつつ、集団性を広げるためのクラス集団活動

保育者による環境設定、活動の投げかけによって、子どもが個人として、また、集団意識をもって自分の興味を広げ、仲間との共通性を体験するよう、昼食前、降園前にクラスでまとまった活動を行う。リズム運動、季節の歌、絵本の読み聞かせ、社会行事・園行事にちなんだ個人製作や共同製作、日常的な出来事の話し合いなど。クラス集団として共に活動するところから生まれる一体感や相互性を育てる。個人的には課題に即することができる、集団の一員としての役割を果たすなどの自己肯定感を持つ体験の機会とする。

指導の意図・方法 保育者を中心に集まって同じことについて取り組むことによる一体感、親近性を持ちながら、他の人の話をしっかり聞く、集団の一員としての自己コントロールや集団のルールに気づいて、自分のこととしていくなど、「共に在る」「共鳴・共有する」ことの嬉しさ大事さの体験の場とする。保育者の指示に従って行うルーティンにならないよう、一人一人が保育者とも繋がり、子ども同士も繋がりながら過ごす時間となるよう個々への細かい配慮をする。異なる素質や育ちの過程にある子ども同士が、それぞれの在り方で共通のことに取り組むことが認められ、受け入れ合う体験からの自信や他者への思いやりやその表現など、自分達の体験、出来事や個々の発想を大事にする。

③ 文化的体験のために園全体活動

子どもの自発的遊びが深い学びになるためには、背景となる大人との日常生活の精神や見聞する文化的刺激の影響が大きい。従来は家庭内、地域によって育てられた伝統的な深い精神性、文化的体験が脆弱になり、子どもは早くから現代社会が重視する価値基準にそった能力の効率よい発達が求められている懸念がある。そこで、子どもであっても、社会の一員であることの自覚を持つことでの成長への意欲、自己中心から社会に位置づいている自分への意識や道徳性を培う機会とする。保護者を招いての発表会や社会見学、外来講師による活動などを行う。

指導の意図・方法 新しいことに触れる。好奇心をもつ。新規のことにも心を開いて安心して取り入れる柔軟な態度などを大切に、そこでの体験の直接の効果を求めず、様々な出会いが子どもの日常生活や遊びへの刺激となるよう、保育者も子どもの側になりながら、無理のない体験になるよう共に受け入れていく。

3 前年度研究の結果からの課題—5歳児の姿を中心とした園内研究で確認されたこと—

5歳児の姿を中心とした園内研究では、幼児期の終わりとしての生活の自立や集団行動はできていく。それが外的適応としてではなく、子ども自身の主体的行為となるためには、子どもの内面の充足感や自信、その子自身の興味・関心を発展させた集団活動による他者との連携や協働体験ができるよう、その前段階からの慎重な保育が大切でないかと考えられた。4歳児期（年中組）で配慮すべき点として以下のようなことが指摘された。

（1）集団保育と個人の体験 —集団活動における自己発揮の内容の落差

幼稚園終了前には、一人一人が自立して行動するようになる。また、集団活動への適応力がついて、

皆であることが楽しくなり、はみ出すことがなくなる。5 才児では、身体能力、言語能力、判断力、自己統制力などが発達し、集団活動への適応が容易になる。就学前に体験しておきたいことを、個人の自発的活動に任せず、保育者主導の環境構成、活動のテーマや目的の設定によって、多様な生活経験や人間関係、役割遂行の体験をすることができる。しかし、昨年度の 5 歳児の異なるタイプの子どもたちの活動状況の比較では、表面的には同じ活動に参加しているにもかかわらず、そこで体験している内容や質の違いが見られた。それは、集団保育としては問題にならず、集団活動への個人の適応の仕方の違いとすることもできる。内面的には個人差が大きい実態、同じ活動に参加しているにもかかわらず、全体を見通してリーダー的に動ける子ども、周囲の動きに合わせて自発的に動いている子ども、自分の思いとの齟齬がありながら、他との関係（保育者の指導や仲間の動き）を勘案して行動をとっている子どもがあり、その場合は友達に当たったり、自分の都合を通そうとして他と揉めることも生じる。協調性やルールに合わせる必要性の理解はできても、自分の内側から自他の関係性、集団目標への積極的関与ができるようになるためには、その前段階における自己充足感や自発的能動性に基づいた、他者への関心の育ちが必要で、それを伴わないと内面の空洞化が懸念される。それが将来にわたって、集団生活における真の主体性、自発性の育ちにもかかわることも推測される。

自分の気持ちを率直に表現し、自分自身の活動の充実感、満足感、意図の実現と共に、仲間との違いや対立、共鳴や共通性、協働の楽しさなどが実感され、その状態が保育者にも受け入れられた後に、集団活動への主体的に向かう経過が重要であることが推測される。4 歳児期の育ちの経過、配慮の検討が求められる。

（2）発達の遅速、身体機能の発達、遊びへの興味関心の違い

幼児期の成長の速度は速く、また個人差が大きいことは明らかであり、特に 3 歳児では生活習慣の自立、言語能力、運動能力の違いは顕著である。こうした違いが子ども同士の関係、遊び方にも表れるが、園生活を重ねる中で、友達との繋がりができると相互に誘われて活発に遊び、遅れている子どもも徐々に追いついていく姿が見られる。4 歳児になると運動機能が安定して、固定遊具による運動遊びが好まれるようになるが、遊びの好みによる活動の仕方の違いも大きくなり、ともすると苦手な遊びが長続きしないことから、この時期に興味関心の違い、成長の側面に偏りが出やすくなることがある。

運動機能の育ちは遊びの生活においては重要な役割を持っており、差が出やすい 4 歳児期に身体活動への自信をつけることは活動への積極性の支柱となるものとみられる。リズム活動での体験が子どもの身体活動への自信をつけ、意欲的、挑戦的に自分を高める動き、活動に取り組む態度の形成となる指導の在り方の検討が重要である。

（3）調和的な学びの機会、育ちの充実感を保障し主体性を育てる必要性

子どもは自分の遊びを遊びこむ過程で必然的に生じる自分の思いを達成するための困難、友達との折り合いや、仲間間の暗黙のルールへの適応、物の扱いや、身体的機能の限界などを一つ一つ解決する中で多くのことを学習している。遊びは子ども自身の選択によるものであるため、ともすると経験の偏り、物事への取り組み方の偏りがその子の発達の可能性を限定する懸念もある。活動環境の一つとして、保育者が設定するクラス活動の中での子どもの状態を丁寧に捉えて対応し、育ちのバランスを整える可能性を探る場とし計画的な活動の意義も認められる。

個性や育ちの遅速で体験の意味が異なることがあっても、その子なりの育ちの過程に沿って自分なりに行うことができる集団活動の中での指導助言は、個々の自分が興味をもってやることを選択したり、

子ども同士で作上げる遊びの中での経験とは異なる。「皆と一緒に」「集団の一員として」「楽しい」「自分なりに真剣にやることで」「進歩、できるようになる」活動は継続的に行うことで、各自の自発的な育ちは促進される。幼児前期における身体活動は、ほぼ無意識に行われているが、幼児後期に近づき、遊びに意図性が強まり、自ら自分の体の動きにも関心を持って体を動かすようになる。その点でも、年中児の時期は重要である。全身運動から部分の動きが育つ時期に丁寧な指導をして、身体活動への自信を高めることで、遊びの内容を豊かにすることへと繋がると考える。

4 4歳児期発達の特性による保育上の配慮

(1) 4歳児期の特徴

○4歳児（年中組）の子どもは、3歳児的特性（依存性 自己中心性）から 5歳児的特性（自立性と社会性）との共在。自己充実（内に向かう）と社会的存在感（外に向かう）との間の揺れがある。

○一人遊びから並行遊び、連合遊びへと進んで、友達との遊びの経験から他人へ関心から自分への気づきがある。できることとできないことに気づく。周りが気になり他と比較する。

○全身運動が自由に、同時に部分機能が活発になるが、まだ滑らかではない。自分の思いが細部にはわたらない。

○やりたいようにできないことや、思うように相手に伝わらないことなどで、感情が先に立つ。

○育ちの過程は個人差が大きい。育ちの側面が多様で繊細な面がある（運動能力、言葉、知的能力、人の気持ちの理解など）

(2) 本園の4歳児（年中組）保育実践の中での配慮

○自己安定感と自己発揮。他と対等な相互作用の体験を大切に。相互受容関係を大切に、相手の気持ちを考えて互いに受け入れ合うように。

○他者への意識。安心できる友達関係。気の合う友達を持つことから、集団性が増進するように。興味・関心の共有、遊び方、遊具への関心 日常体験の共通性による仲間との遊びを大切に。イメージの共有による相互作用の継続からの自己発展を大切に。

○身体機能の安定・促進。移動（スピード）、障害物にかかわる（よける、よじ登る）など身体活動から「できる」実感を増やす。

I 本年度の研究目的と研究計画

1 研究目的と保育の実際

本園の保育実践における子どもの実態から、4歳児期の子どもの特性に応じた保育上の配慮点を具体的に明らかにする。昨年度の園内研究の継続として行う。

昨年度研究対象児の4歳児期の育ちの過程の振り返りから、4歳児期における計画活動（リズム活動）と子どもの全体的な育ちとの関連の経過を捉え、5歳児期の集団生活における主体的活動につながる内面性と行動力を育てるための配慮点を検討する。保育者のP-D-C-A（計画－実行－反省－改善）の実践とする。

(1) 昨年度研究対象の4歳児（年中組）の時期の子どもへの育ちの経過から計画的活動と遊びとの関連を再検討し、個人的特性の応じた計画的保育における配慮点を考察する。

- (2) 本年度の計画的活動における子どもの活動状態を昨年度とは異なる視点から捉える試みから、指導方法の具体化を図る。

本年度の4歳児クラスの実態による保育のねらい

- (1) 子ども同士の関係を育てる(3歳児保育では、個々の育ちに合わせて、じっくりと遊ぶことを大切に、保育者の子どもの受容による精神的安定を図ってきた)
⇒子ども同士の受容感を強めることで、ありのままの自分への自信をつける。
- (2) 生活習慣における自立性を促す(入園当初から、生活習慣の自立に個人差が大きい実情があり、個々のペースを尊重し、丁寧に支援することで、より良い習慣の定着に時間をかけた)
⇒生活における自立感「できる自分」の自覚、「他の評価への気遣い」の軽減による。
- (3) 身体活動(運動遊び、リズム活動)に興味を持ち、体を動かすことが好きになり、活発に、また習熟への意欲をもって粘り強く行動する。(繰り返しや目標を持つことは他動的になりやすい。自分からそうした気持ちを持てるよう、またそうした状態を大切に支援する。人間関係を育てながら、個の活動充実を図る)。
⇒身体能力は具体的な成果が遊びなどに表れ、自分でも他者からも認められる。

ねらいの意図

- ・子ども同士の対等な関係を育てることの重要性。同じ環境でどの子も自己活動を充実しようとする遊びの中で子ども同士の結びつきは強くなる。それぞれの思い付きや発見が取り入れられ、生かされ、いわゆる学び合い、集団意識も生まれる。それは力関係や、功利的な意図によるものではなく、同じ方向と共感による自発的な学習であるため、自他の意識が強くなるこの時期の友達関係を大事にする。
- ・一人一人の個性の伸長は集団生活の中で磨かれ、発揮される面がある。誰もが習得することが望まれる心身の能力や生活習慣等があるが、それぞれの資質に応じて多様な過程になる。得意不得意、好き嫌いがある。自分と違う相手を尊重して、互いに認め合いながら、補い合いながら、共に目指すことに向けて行動する中で、他者を尊重する人間性の基礎としたい。

指導上の全体的配慮点

① 主体的な育ちを支える(自尊心の芽生え)

発達の遅速を受け容れつつ、無理をしない。子ども自身からの育ちを尊重する。

表面的な適応、保育者への迎合、集団圧力への同調等を避ける。賞罰(褒める、注意する)などによる誘導)による外面的な行動レベルでの学習にならないように。自分からの取入れ、自発的習得を受け入れる。

② 感情(身体性)と理性(自覚)の調和を図るように時間をかける。

保育者の言葉での説明や、言葉上の理解と子ども自身の理解、感情的な納得のずれを受け容れて、指導を焦らないで心身ともに安定するよう、緩やかな枠組みでの生活で自己調整、自己決定のゆとりをもつ。

③ 活動の過程を大切にする

活動の動機・意図と成果と本人への意味を大切にする。保育者の援助は、子ども自身の目的に即するよう配慮しながら、子ども自身の依存心の度合いを勘案し、保育者への思いを受け入れ、必要な援助を

丁寧に行う。

2 研究方法

研究1

令和4年度研究対象児6名の年中組当時の保育記録及び、保育者相互の振り返りから状態を整理、省察する。対象児6名の保育記録、エピソード等から対象児の遊びとリズム活動の状態として、その子の特徴的な側面に着目し、他児へも共通する状態として考えて行く。

研究2

本年度の4歳児について、これまでの経験からの指導の配慮をしつつ、育ちの過程をリズム活動における子どもの意志的な動きを中心に、保育者の援助の仕方、及び生活全般の在り方との関連を考察する。

研究対象

- (1) 発達の特性の異なる園児を主な対象とし、4歳児期を通しての活動状態を把握し、クラスの状態全体も考察に加える。
- (2) リズム活動場面、及び自由遊び場面の担任保育者による観察、観察者による観察によって子どもの状態を捉える。その他日常保育活動において子どもの状態が顕在したと思われるエピソード事例によって子どもの状態を推測する。
- (3) 担任保育者の日々の保育記録を参考に使用する。

(研究対象児)昨年度の研究同様、集団保育において一般的に認められる子どもの3つのパターン、活動的自立的で集団生活に積極的なタイプ、集団生活に消極的で保育者配慮の必要性が高いタイプ、集団活動に平常的に適応ができるタイプ、を取り上げた。

A 慎重漸進的タイプ B 平均的なタイプ C 積極自立的タイプ

3 研究結果

研究1の結果

I リズム運動における子どもの体験の4歳児の場合の要点

本園実施のリズム活動は、総合的な身体活動として、身体機能、リズム感、想像性、相互性、団体性など多様な要素を含み、各自のペースに合わせながらも、集団効果も併せ持つ活動と考える。4歳児期の自己中心から他者意識が急速に育ち、自分なりに動きながら仲間を意識して刺激を受けつつ、自分の活動を作っていく。仲間の刺激を受け容れながら、自己調整をする体験としての教育的役割を持つと考えられる。昨年の振り返りにおける教師の気づきを基に以下のようにまとめた。

4歳児期に意味を持つとみられるものは太字で、子どもの体験を下線に示した。

表1 リズム活動の保育上の意義

I 身体活動への積極性～ 身体活動への親近感と自己肯定体験

A 動くことの楽しさから能動性へ、

① 音楽に合わせて動くことの爽快感・楽しさ、自分から動くことへの自信を持つ。

② 保育者に見守られて安心して動く

③ 空間を広く活用し、自発的に位置して自由に動く

B 動きへの慣れから自発性へ

④ 繰り返しによって動きが熟達する体験をする。できるようになる実感。

⑤ 自分の動きが受け入れられる（上手一下手はなく、達成点は自らの感覚で感じる）

C 身体活動への意識から意図性へ

⑥ 身体各部位の動きに注意を向ける（脚、つま先 腕、手先 胴体、頭、目線など自分で気づいていく）

⑦ 歩く、跳ぶ、曲げる、伸ばす、支える、など身体機能を使っていく。（身体の柔軟性や強さと意思、意欲、子どもの頑張る意欲）

D 相手や動きのイメージへの対応から表現力へ

⑧ 一人の動きと、2人、3人の組み合わせなどから、相手を見る、動きを合わせるなどの協働体験をする。身体を触れ合いながらの協調、温かさ。

⑨ 動きにイメージをもって、相手を見ながら身体を意識的に動かす

⑩ 自分の動きへの努力から意志力へ自分なりの意図（イメージ）をもって動く、できる動きを精一杯試みる

II 集団意識 ～みんなと一緒に、

A 共に動くことから共鳴、連携へ

① 共に動くことからの親近感。

② 同じ目的をもつことによる、仲間意識、集団メンバー意識をもつ

③ 集団の中での自己発揮、仲間を感じながら自分なりに行動する。

④ 仲間と共鳴する、合わせる、誘発される、対抗する、競うなどの多様な体験をする

B 他集団との体験から役割意識へ

⑤ 他のグループ、他学年に、「見せる－見られる」「学ぶ－学ばれる」などの相互性の体験をする。

III ルールや指導への適応 ～決められたことを守る、教えられたことを取り入れる

A 活動の枠組みからルールへ

① 場所設定、順序、時間などに合わせる。

② 休憩と観察、待つ、切り替えるなどへの自己コントロールをする。

B 保育者の援助、助言から指導から意図的学習へ

③ 保育者、年長児の動きなどの取入れ

④ できつつあるところへの援助、気づいていないことへの注意等の指導を受入れる

2 昨年度の子どもの事例検討による自由遊びとリズム活動との関連

昨年度の研究対象児の事例研究から、4歳児における指導上の留意点を捉えた。

表 2-1 A タイプ (昨年度研究対象児の4歳児期の育ちの姿のまとめと考察)

	A1	A2
年 中 4 5 月	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>運動機能の他児とのずれ</u> (走る、登る等の動きがスムーズにできず) — 集団遊びへの不参加。(鬼ごっこなどに入りにくい。他児を真似る行動が多いが、遅れてしまい離れる。 ・ 一人でいることが多い。— 鉄棒ぶら下がり、太鼓橋など遊具での遊びをする。 ・ 徐々に食事前後の行動は早くなる <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>できることに集中する</u> (好きな、できる種目を一生懸命に行う。) ・ 待機時に交流 (他を見て笑ったり、友達と喋る。ふざけもある) ・ 指導への注目 (怪我への注意に対して真剣にきく)。 <p>⇒ 配慮</p> <p>設定されている場面で安定して自分を出して取り組む気持ちを受け止める。</p>	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>外遊びは他児の遊びへの関心が低い</u> — ひとりでのボール遊び、滑り台遊びなどをする。夢中になると繰り返し遊び、軽い怪我にも気づかずに楽しむ。 ・ 室内では他児の活動からの刺激 — 室内遊びでは、他児が作るものを見て自分の似たものを作りたがるが、独りよがりになり途中で援助が必要。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>できる事を意識的に</u> (ギャロップの手がよく伸びるなど、部分的にしっかりやる。) ・ 待機時に交流の場 (仲良しの子と喋る。) <p>⇒ 配慮</p> <p>集団全体のルール、目的よりも、その子にとってのその場の意味を優先する。</p>
6 7 月	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分からの遊びができない。— 他児の遊びの取入れの気持ちがあるが、内容理解や行動がついていけない。 ・ <u>保育者への依存行動</u>が多い。自分のしたいことができない時保育者の助けを求める。友達との遊び (だるまさんが転んだなど) に定着できず、保育者のところで泣くなど。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>達成感の体験。できるようになった種目があると好んで行き、保育者にもアピールする。</u> (スキップに張り切る) <p>⇒ 配慮 進歩しているところ、気持ちを入れているところの着目する。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 動きが活発に — 会話が活発になり、お気に入りのものを作って遊ぶ。 ・ <u>保育者との隔たり</u> — 自分の要求を保育者に言えなかったり、保育者の話をよく聞かずに勝手な行動もある。 — 周りを気にせずに騒いだりもする。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ リズムの動きの自発的取入れ。できるようになった動きを遊びの中で練習 (ケンパ)。<u>ごっこ遊びの中でリズム動きをする</u> (パーティーごっこなど) <p>⇒ 配慮 自分からの遊びのしやすさ、見守り。</p>

<p>9 10 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自分なりの遊びへ</u> — 他児の遊びに入ることをためらい、砂場などでは用具は慣れて自分なりに遊ぶ。他児と一緒に製作をしても途中から離れて自分のできる事へ。(運動会苦手種目は自分で出来そうもないとしり込みする。) ・ 保育者の援助を求める — 手助けで遊ぶ。 ・ 他児からの承認への関心 — <u>できるようになったことを他時に認められて喜ぶ</u> (テープ張りなど上達してできる事を他児に褒められると嬉しそうにする)。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <p>自己発揮の場となっている — <u>リズム活動が好き</u>で「今日やる？」と聞きにくる。</p> <p>⇒ 配慮 子どもの気持ちを汲んだ日案の重要性、他の場面でも安定できる場に。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他児とのずれ — 他児の遊びに入りたいがイメージのずれがある—砂遊びで作る物のイメージがつかめず、他に移るなど。 ・ <u>ルールによる遊びのイメージの共有</u> — かくれんぼ、鬼ごっこなどのルールのある遊びから、リレー、野球などへの発展もある。 ・ 室内遊びも持続的になる。 — 製作物も形になり、ドレス作りを保育者に手伝ってもらい完成するなど。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <p><u>リズムの時間を楽しみにして、積極的に片づけた</u>り嬉しそうに参加。</p> <p>⇒配慮 本人の気持ちを汲んで、一緒に動くなど。</p>
<p>11 12 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自分の遊びへの定着</u> — 一人で絵本読みなどがあるが、製作、砂場での山作りなど、自分のやりたいことが明確になってき持続。 ・ 活動への消極性 — できそうもないことには尻込みする。 ・ 集団遊びへの参加と不調和 — 鬼ごっこなど簡単な集団遊びには入れて他児から励まされるが、自分を出すようになってぶつかることが多くなってはズレたりする。 ・ 特定の子 (Cタイプ) との関係が強い — 待つ、手伝うなど援助的関わりによる。 ・ 新しい活動からの誘発 — 劇の練習などできた体験によって、他児の遊びに自分から入ろうとするが、合わずに外れる。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <p><u>繰り返しの動きのため安心して、自分なりのやり方</u>で自発的にやろうとしている。</p> <p>⇒ 配慮 保育者からの指示を控えて、任せていく。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>他児の遊びへの興味が増す</u> — 遊びに加わるが、模倣的で外面的に合わせて傾向。イメージの共有がないと相手の行動予測ができず動きがずれる。自分の思いや疑問を表現しない。 ・ <u>物、ルールの特性が接点</u> — 積み木遊び、ルール遊びなどでは遊びの内容が伝わりやすく、持続する。 ・ 他児に活動の取入れ — 製作などは他児と同じものを作っても、遅れながらも自分なりに進める。 ・ 周囲への関心の希薄さ — 劇練習では位置を間違ったり、不確かで自発的に動けず、指示によって安定して行動できる。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <p>全体的にわかってきて<u>慣れで動いている</u>様子。</p> <p>⇒ 配慮 傍できちんと動いて見せるなど、気持ちを引き立てるような関わり。</p>

<p>1 3 月</p>	<p>遊び（生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>生活の安定</u> — 出席カードの読み取り、給食時の態勢など身についてきた。帰りは支度が早くなり、待っている。挨拶の声は大きくなる。 ・自分の遊びの持続 — 他児との行き違いがあっても遊び続ける。他児と一緒に絵本、ブロックなど落ちて着いて嬉しそうにしている。 ・<u>他児との遊びへの部分参加とずれ</u> — 凧上用の凧を4人で作り庭で走り回る。鬼ごっこに加わるが、自分勝手に動いてしまう。他児との会話が増える。 ・自分の意志の実現の課題 — 意思を出すようになるが、他児が遊んでいるところには入れない。鬼ごっこがしたくて<u>他児を誘うが合わない</u>。物の扱いなどできないこともあり、涙ぐむなど。 ・<u>個人活動は新しい事への挑戦</u> — 縄跳びがうまくなり、逆上がりにも挑戦する。そのことを気にする。太鼓橋で動ける。砂遊びに交ざってしっかり掘れた。卒園式は真剣に見ていた。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムはよく見て参加。グッパをやりきる。 ・リズムの新しい種目に興味をもつ。 	<p>遊び（生活）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>自分の気持ちの表現</u> — 積み木を使いたいことをはっきり言い、家のイメージをもってつくり、段ボールと組み合わせて継続する。滑り台を作りたい、そりが作りたい（補助を得て作り他児も入って遊ぶ）など目当てがでて実行する。 ・<u>仲間の模倣と交流</u> — 言葉、会話がはっきりしてきたが、仲良しの子の言葉を使うことがある。遊びへの参入が苦手で相手が推察してくれる。（いろいろな場面で自分の気持ちうまくが表現できず、行違う）、お家ごっこなど<u>うまく遊べている時には、他児の要求を受け入れることができる</u>。 ・個人の遊びの内容が豊かに、挑戦的で絵の内容が多くなり、車や新幹線などよく描く。縄跳びではいろいろな跳び方に挑戦できるようになっている。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平常活動として参加する。
----------------------	--	---

A タイプにおけるリズム活動の意義と配慮

全体的な育ちが緩慢であるため、学期当初は流動的に展開する自由な活動場面における自己発揮は不安な状態である。好きな遊びが受け入れられ、打ち込める状態が作りにくい。リズム活動場面は、自分の居場所と活動内容が設定され方向づけられているため、安心して方向づけられて活動ができる。活動が子ども共通に楽しめる要素を含み、行動の手がかりが年長児から得られ、クラス集団の連帯感を伴う。対象児2タイプ共に年中組当初から、リズム活動には「できる事を意識、集団所属意識」状況として積極的に取り組んでいく。2学期になると継続活動であるため、「自分でわかって、自分から主体的に動く」。3学期には、「自分の動きの向上意識」が出ている。並行して、遊びにおいて自分ができる事を選んでやろうとする、自分の意向を友達との遊びの中で実現しようとする意思が表れてくる。仲間との対等な関係での遊びの実現が課題となる、主体的な態度は認められる。

その子どもにとって、集団活動における身体能力的な充実感、自己受容感の体験となるよう、保育者の指導の意図とは別に子どもにとっての意味を受け容れていくことが主体的な育ちの支えとなるとみられる。

表 2-2 B タイプ (昨年度研究対象児の 4 歳児期の育ちの姿のまとめと考察)

	B1	B2
年 中 4 5 月	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自分の興味のある活動で安定</u> — 一人でブロックや絵本に熱中。 ・ <u>他児の遊びとの交流</u> — 徐々に他児のやっていることにも関心を持つようになり、絵を描くことも一緒にやるようになる。 ・ グループでの活動持続への努力 — 時にグループから途中で抜けたりする。テンポが遅れる。一つ一つを懸命にして他に合わせようとしている。 ・ 園生活への適応へ — 給食も完食になる。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年少クラスの継続の様子で、<u>自分なりに動く</u> <p>⇒ 配慮 年少組での遊び、仲間関係が継続し、安定している。見守り。</p>	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>新環境での不安定感</u> — 新しい保育室で落ち着かず部屋を走り回ることが多い。 ・ 行動が定まらない — ままごと遊びなどをよくやるが、貸し借りのやり取りがうまくできず、遊び中走り回るなどがある。 ・ <u>集団状況からのずれ</u> — 給食準備中に隠れて遊ぶなどする。保育者の注意はよく聞いて守ろうとするが難しい。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>あまり集中せず、待機中に喋ることが多い</u> <p>⇒ 配慮 年少組からの遊びができず、友達関係も変化する。自分なりにあそびやともだちが安定するまで、見守り、注意や誘導を控えめに。</p>
6 7 月	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>戸外での一人遊び</u> — 登り棒や太鼓橋に挑戦する。外遊びはひとりが多く、他児になかなか言葉をかけられない。自分からはあまり声を掛けない。 ・ <u>自分の遊びのイメージを持つ</u> — マリオのゲームをスペースなどを考えて自分で作る。数日続ける。 ・ 昼食はきちんと食べる。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>関心が薄く、自分なりに動く。</u> <p>⇒ 配慮 年少組からの遊びから、心身の育ちからの興味関心の実現、など模索しながら自分の遊びを作っていく。リズム活動への新鮮みがないことから、何らかの助言や誘導が必要かとみられる。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友だちとずれ</u> — 友達をもめたとき、問い詰められると言い逃れをしたりする。 ・ 友達への関心と関わり方の模索 — わざと他児の遊びのものを取ったりする、などがある。友達と気が合うと 3人でヤモリを見つけて一緒に遊ぶなど打ち解けてくる <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>関心が薄く、できる範囲で動く。</u> <p>⇒ 配慮 友達と遊びたい気持ちが強く、適当な遊びが媒介とならないため関係が続かず、遊びを作れるような配慮が必要。不安定な状態を理解し寄り添う。</p>
9 10 月	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友達との遊びの難しさ</u> — 遊びたい子 (他の子と一緒にいる) とうまく遊べないことがある。 ・ 保育者の援助 — 保育者と遊びながら他の子の遊びに加わるが、積み木や砂遊びが思い切りできない。 ・ <u>自分の遊びのイメージは強い</u> — 自分で好きなもののイメージはあってどんどん作り、細かいことに気 	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友達との合流</u> — 庭で他児の遊びに加わって走り回ったり、葉や虫を探したりして遊ぶことが多い。 ・ <u>自分の遊びのイメージが弱い</u> — 自分がこれという遊びの集中することが少なく、周りを見ていることもある。

	<p>づく。できる事をアピールする。</p> <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムの出るタイミング、スキップのテンポ遅れがち。 <p>⇒ 配慮 興味や、遊びたい相手の好みなどが出てくるが、共同遊びへの契機がないと十分には遊べない状態で、個々の活動が発展して繋がるようなものやテーマの提供。リズム活動も楽しくする保育者からの合図などの援助。</p>	<p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムは音のテンポに合わせて動くことができ、楽しそうにする。 <p>⇒ 配慮 遊びはその時の思い付きや環境への働きかけで終わっているので、自分達のテーマを見つけるヒントなどの提供。リズム活動は気持ちが向く、活発にできるので、保育者の言葉かけなども有効か。</p>
<p>11 12 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と遊ぶ — 休みがちだが、出席するとCと一緒に遊ぶ。お絵描きを好み、自分の思う材料を求める。 ・<u>自分の遊びをしっかりと進める</u> — 木登りを2階近くまで、他児を待たせながらも頑張る。庭で根気よく虫探しをして、図鑑を見る。作りかけの製作物を継続して作る。 ・<u>友達との関係の安定</u> — 他児に遊びに誘われると自分の遊びがしたいと断り、他児が合わせてくれる。物の不足などでは譲ってあげる。製作は自力で頑張る。 ・<u>クラス活動への積極性</u> — 保育者のクリスマス絵本を楽しみにしたり、皆での遊びの前の片づけは早く積極的。クリスマス劇当日は緊張しながら参加。 ・自信のなさ — 注意されると他児のせいにしてたりすることがある。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・側転の足がきれいになる。動きがスムーズになる。 <p>⇒ 配慮 目的に沿って自己発揮をしようとする。</p> <p>何がしたいのか、どうすればよいのかなど、考えやげるきっかけや、かかわりが有効か。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>自分で理解して動く</u>。 — 自分でわからないことは理由を聞いてわかるとやる気になる。相手に遊びの説明、一緒に完成したりする。絵本の選択など意思が明確になってくる。 ・<u>活動が広がる</u>。 — 虫探しをしたり、虫のお墓作りを他児としたり、保育者に自分の話をしたがったりする。 ・<u>友達遊びが増える</u> — 3人ぐらいで、布、ブロックなどを組み合わせてごっこ遊びを楽しむ。C1に優しく接したり。前日の活動を覚えていてできなかったことを継続する。 ・行動に自信が出る — クリスマス劇当日は堂々とやる。 <p>~~~~~</p> <p>(リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3歳児の動きをみて「赤ちゃんみたい」など批評する。 ・リズムを張り切り、参観日には頑張る。 ・ふざけて年少組の場所に座り、側転をしなかったりした。 <p>⇒ 配慮 できるようになった自信、気持ちのゆとりからの多様な行動が現れる。保育者の気づかせ方が大切(注意ではなく、自分からコントロールするように)</p>

<p>1 3 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自己活動が活発に他との遊びにつながる</u> — お面づくりも早くなりそれで遊ぶ。作りたかったものが完成すると、庭で活発に遊ぶ。 ・ <u>友達関係の維持への努力</u> — 他児たちの遊びに交ざってルールが飲み込めると表情豊かに遊ぶ。戦いごっこで負けそうになっても踏みとどまる。グループで遊びに加わるようになり、遊びの中で他児からの強い言葉に泣くことをとおして、気持ちを通じ合うことがあった。 ・ <u>園生活への積極性、自己修正</u> — 片付けの手伝いなどよくやる。縄の結び方など、自分からきちんとしてようとする。昼食時、自分の作業にこだわって遅れた翌日は、早めに準備するなど。 ・ <u>保育者への意識</u> — よくできたことは担任に進んで見せる。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ リズムの出番に対しても遅れないよう態勢を整えたりする。一つの活動が済むと、そこで気持ちが途切れ、全体的の集団の動きから遅れがちになることが分かってくる。 ・ 3学期初めにスキップ、ギャロップができるようになり張り切る <p>⇒ 配慮 目的を持ってものを作ったり、他児の遊びに加わる、活動の意図がはっきりしてきて遊び続ける。リズム活動も動きを意識的にして向上している。活動のための材料等の援助、動き方への具体的動きの援助。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自己活動が活発に他との遊びにつながる</u> — 庭で幼虫探しなどに熱中する。幼虫は大切に持ち帰る。張り切って登園し、ブロックで作り、戦いごっこを張りきる、年長組にも交ざる。休みがちだが、出席すると、それまでの遊びに入って元気に遊ぶ（お面やマントをつけての戦いごっこなどグループで）。 ・ <u>生活習慣の向上</u> — 片付け身支度をてきぱきこなす。片付けは自分から気づいてできる。 ・ <u>状況に対する気持ちのゆとり</u> — グループでの遊びでは他児の行動の寛大に対応する。課題の製作はきれいに仕上げる。 ・ <u>自己コントロールへの過程</u> — 遊びに熱中して、片づけをやりたがらないなど。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の番には積極的に動き、伸び伸び動く。 <p>⇒ 配慮 自分でやろうとする気持ち、相手との交流への努力が十分ではない状態の時期では保育者の励ましや多少の介入が関係の維持促進につながる。</p>
----------------------	---	---

B タイプにおけるリズム活動の意義と配慮

年少組の経験から自己活動と仲間遊びの両方に関心が生まれているが、遊びへの意図があいまいでどう活動を進めるかの模索の過程にある。遊びや生活態度が不安定に見える状態の中で個々の能力を自分なりに伸ばしている。その時期の長短はあるが自分なりの試行錯誤から、作業や行動が的確になっていき、一つ一つの遊びが持続発展していくようになる。リズム活動への取り組みは、遊びの状態を反映しており、リズム活動の役割は消極的である。そこで、活動への参加意思を持って、自分の動きに意識を持つように励ます、保育者も積極的な雰囲気を作ることが動きを活性化することが予想される。集団意識が強まる後期には、遊びにおける身体活動、製作活動などの能力が高くなっていくが自分の思いの達成過程での葛藤があり、対人関係では個々の自覚的な行動を促す保育者からの助言が有効とみられる。

表 2-3 C タイプ (昨年度研究対象児の 4 歳児期の育ちの姿のまとめと考察)

	C1	C2
4 5 月	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友達との遊びから自分の遊びへ</u> — 音楽会ごっこ、離れて自分の馬作り、旗作りなど自分の制作に集中する。 ・ <u>自分の活動を確実に</u> — 積み木を丁寧に積みなおす、逆上がりでの練習をするなど、一つ一つの活動をしっかりする。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どの種目にも一生懸命おこなう。 <p>⇒ 配慮 年少児の 1 年を経て、生活への安定感をもって一つ一つの活動に落ち着いて取り組んでいる。遊びとリズム活動に同等に意欲を示しているので、負担をかけないように。</p>	<p>遊び (生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友達遊びから自分の活動へ</u> — リボン作りから他児の活動を見てポケモンを自分で作り、歌遊びから積み木を舞台に音楽会ごっこ、マイクも作り遊びを続ける。 ・ <u>自分を際立たせる</u> — 他児とのやりとり「そうじゃない、これ私の」などがある。 ・ 保育者の助言を得ることが多い — 他の子どもへの批判など。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年少児を気にして、得意そうに動く <p>⇒ 配慮 遊びへの意欲があり、行動的などころから、自己主張が強くなることがある。外より自分に気持ちりが向くような助言。</p>
6 7 月	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>活動経験を遊びにする</u> — リズムの場所を作ってリズムごっこをする (メリーさんの羊、ちょうちょ、スキップ) ・ 遊びの工夫をする — 間違い探しを作って他児に見せる。 ・ <u>できるようになったことで遊ぶ</u> — 保育者に手紙を書く (書ける文字が増えて嬉しい)。母へのプレゼントきれいな箱づくりなど落ちついて安定して活動 ・ <u>生活活動に積極的</u> — 庭の片づけを最後までしたり、他児の片づけを手伝う。 ・ 自分のことに前向きに — 七夕では「ピーマンが食べられますように」。給食完食を喜ぶ。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 一つ一つの動作をきちんとやろうとする <p>⇒ 配慮 自分の活動が周りからも受け入れられることで安定感が強まる。自然体での活動を大切にする。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>周りの物を遊びに生かす</u> — 外遊びが多く、桑の実で色水、マットで車作り。ペットボトルで水稻づくりなど活発。 ・ 友達遊びからの思い付きの実行 — 学校ごっこでトラブルもあるが、ランドセル作りから、文字、数に進む。ウサギにも興味を持ち、考えて創る。 ・ <u>興味のある遊びは粘り強く</u> — ブロックの車に乗せて、積み木の坂を走らせるなど他児と一緒に粘り強く続ける。 ・ <u>自分の活動中心</u> — 片付けなどは不満を持ちながら行う。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 歳児が気になり、助けるようなことをする。 <p>⇒ 配慮 遊びの内容が能力発揮に会うと安定して打ち込むが、保育者や周囲からの評価を気にするところから本来の力が出し切れない不安定さがある。温かく受け入れる。</p>

<p>9 10 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>遊びのイメージが複雑に</u> — 段ボールで作ってお家ごっこ。いつもの家と違うのを作りたい、広くしたい、お風呂、ベットなど、形、色にこだわって丁寧に作る。 ・ <u>他児の遊びに参加して展開する。</u> — 輪投げ作りに参加し、レストランごっこへと進みそこで盛り上がる。ご馳走づくりなどは自分で工夫してどんどん作る。 ・ <u>物の活用の工夫をする</u> — 制作では廃材の活用の提案など、よく考える ・ <u>生活に自発的になり予測をして確実に行動しようとする</u> — 運動会では順序が変わることに不安を持つ。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 苦手な種目も丁寧に動こうとする。 <p>⇒ 配慮 自分でできそうな事や求められていることに応えようとする。本人の気づきを大事に。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>遊びの幅が広がる</u> — 午前は外遊び、午後は室内遊びと園内を広く動く。2人で草花探し、砂場での穴掘り水流しなど。園庭のあちこちで遊ぶ。室内では手紙書きなど細かい活動の後、お面をつけて外に出て年長の遊びに加わるなど。 ・ <u>ものづくりからごっこへなど遊びの自発的な展開</u> — 人形づくりなどは保育者のヒントで自分たちで工夫しモルモットづくり、サンダルづくりなどいろいろ考えて作れる。コマを作って回して遊ぶ、マットでのお家ごっこなど、次々に遊びを広げる。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のペースで行う（習い事での習得から挑戦性が希薄）。 <p>⇒ 配慮 遊びのヒントがあるとそこから自分なりの展開がある、ゆったり遊ぶようにして時間をかけてオリジナルな発想が出るように。</p>
<p>11 12 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>製作などの技術が進み活動が発展する</u> — カチューシャを2人できれいに作る、カプラの製作も独創的。自分の発案で双六を作るが、その先は空間を広げてままごとになる。 ・ <u>仲良しの子との相互作用で活動が広がる</u> — 手紙を書いて封筒を作ったり、ボール遊びからリレーに交ざるなど、仲良しの子と一緒にやりたいことが多い。仲良しの子が来ないと所在ない。 ・ <u>物事の経過結果を把握して持続</u> — 自分としてうまくいかなかったことを憶えていて次にやる。制作物は大切にしてお目も置いて直したり、取り出して遊んだりする（双六遊びなど）。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仲良しの子と一緒に動くことが楽しい <p>⇒ 配慮 仲良しとの相互作用で活動が持続的になる。関係性の中で視点が広がり展望が開ける。</p> <p>リズム活動とあそびに同じ態度で取り組む。</p> <p>活動が持続するように物や場の設定に配慮。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>活動に目的性があり達成感を持つ</u> — カプラを4人で30階以上のタワーにして達成感。逆上がりの練習に取り組んでいる。 ・ <u>思い付きで遊びが変わる</u> — 他児の犬作りから、猫作りを始める。立つように細部を工夫。園庭での遊びは2人で木の実探しやレジャーシートを敷いての場づくりなど。 ・ <u>多人数でのルール遊びに興味</u> — リレーごっこは張り切って行う。色鬼のルールをよく理解して率先して遊ぶ、5人で続ける。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どの種目も自由に動けて、所々で気持ちよさそうに表現的に動く。 <p>⇒ 配慮 遊びの目的ができると打ち込める。集団遊びでは先に立って動きリーダー的な役割を取る。自分の力が十分に出せるように、ヒントや場の設定に配慮し他の子どもとの相互作用を促す。</p>

<p>1 3 月</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>場所の選択、遊具の活用が上達し、場を作りながら遊ぶ</u> — 積み木の坂道で車を走らせる工夫をして遊ぶ。道の貼り方など思いついて進んで作る。仲間との遊びが継続。庭では色鬼など活発に遊ぶ。 ・ <u>遊びの内容が緻密になる</u> — 自分で材料を選んで作れるものと、材料によって作れる物を考える。ストロー、紙コップなどから思いつくものを作りだしたり、プレゼントづくりも目的から材料選択もする。 ・ <u>遊びをより楽しくする工夫をする</u> — ルールを変えたり、そこから新規の製作をしたりする。 ・ <u>担任とのかわりを求め学ぼうとする</u> — 紙でタコづくりをする、担任の話をよく聞きながら進める ・ <u>周囲への意識が広がる</u> — 年長組の活動から自分も手紙を書いたり、他児に注意や助言をする。 ・ <u>生活を自主的に行う</u> — 自主的にロッカー整理をする。昨年<small>の</small>節分を覚えてその時の気持ちなど話す。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>音楽と動き、種目の順序を読み取って、早めに動いていく</u>。どの種目にも同じように真面目に動く。 <p>⇒ 配慮 これまでの経験の積み重ねを着実にして、活動能力、遊びのイメージは進んでいる。年中児の段階としての、この子<small>なり</small>の自他（ものも含めた環境）の調和的な関係形成ができてきているとみられる。課題や団体活動などへの対応を急がずに進める。</p>	<p>遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>仲間との繋がりでの遊びが多い</u> — 仲良しの子が来ないと所在ない。3人での犬づくりでは、率先して作るが部分的に他児とお揃いにする。折り紙をグループで楽しむ。外あそびではグループに入ってルール遊び、砂場遊びでは3人で長時間つづける。 ・ <u>他児の活動をヒントに独自の物を</u> — 他児の製作からの刺激で、自分のオリジナル作品をきれいに作る。牛乳のカップの独自の制作をする。こだわりのあるものは完成させようとする。 ・ <u>周りへの適応と自己発揮と葛藤が見られる</u> — 決まったものを作るときに自由にやっとうまくいかない時がある。遊びのなかで他児の動きでうまくいかない時などは我慢が出来ない。他児の言葉で感情的になることもあり、また他児の気持ちを察して優しくする。 ・ <u>生活場面ではよく気が付く</u> — 積極的に帰りの椅子並べなどはよく手伝う。 <p>~~~~~</p> <p>リズム活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>対応が速く自由な気持ちで伸び伸び動く</u>。 <p>⇒ 配慮 心身ともに能力が高い面があり、時に周りとのバランスが難しくなる。自分なりに解決しようとした体験から、葛藤状況に対するトレランスが養われてきたとみられる。この子の特性が十分生かせる状況を大切に。年長クラスで多様な活動が導入されることで、バランスがとりやすくなることも考えられる。</p>
----------------------	--	--

Cタイプにおけるリズム活動の意義と配慮

Cタイプの子どもは、年少クラスでの自由な遊びと集団生活の習慣形成との経験をへて、心身の発達状態としては安定して次の段階に進んでいる。園環境に積極的にかかわる事が出来、自立的な態度で保育者の意図を汲んで、また友達への関心も持って活動展開をしている。Bタイプの子どもにみられる4歳児期の不安定さの顕在化はC1においてみられるが、活動自体は活発である。リズム活動と遊びとに同等に取り組んでいるところから、リズム活動での目的である、体の機能を高めるような保育者側の意図的働きかけがより有効であるとみられる。

結果のまとめ

4歳児期における本事例における遊びとリズム活動の子どもの参加意欲、活動成果を子どものタイプ別に概観すると、以下のように捉えられる。

Aタイプ リズム>遊び (後期) リズム=遊び

Bタイプ リズム<遊び (後期) リズム=遊び

Cタイプ リズム=遊び

自由な遊びにおける体験と設定された活動体験が、異なる場面的特性を持っているがいずれでも自己発揮ができることが内面のバランスの現れと考えられる。しかし、子どもにとって、一定時期、異なる状態、どこかに力を入れることが次へのステップの準備状態と捉えることもできる。4歳児期は、自分の思いとその実現の落差が身体的に、対人的に、対物的に課題である。自分なりに試行しながら充実感を持つ体験を増やしていくためには、リズム活動場面が一つの状況としての役割を持つとみられる。子どもの運動能力の差が大きいいため、保育者の個々への働きかけの工夫が必要である。

研究 I の考察

表2から、A、B、Cタイプそれぞれにリズム活動への取り組み、その体験の仕方が違っていることが明らかである。特にAタイプの子どもにとっては、同一活動体験による動きの上達が、他児の遊びへの参入をしやすくしているとみられた。保育者の子どもたちの行動に対して、注意、容認、見守り、援助、推奨など、どの様にかかわるか、子どもへの効果による選択が必要である。個人的指導と、他の子どもとの公平性、集団状況形成への影響の観点から、その時々で指導の仕方が考えられなければならない。指導の視点は複層するが、4歳児の特性から、まず、早い時期には本児自身の気持ちを中心にかかわる(第1段階)(第2段階)。2学期以降は子どもの思いが広がるので、他の要素との関係も加えた対応に進める。4歳児においてクラス全体への指導のねらいが先に立つと、保育者の指導を気にして、自分から気づいて自発的な学び、努力が育ちにくくなる。子どもの意思に添うことが基本となろう。年長組になってから、動きや行動への意識化を図るようにしたい。自分の動きに対する不安、苦手意識を持たないことが、物事への積極性、自己肯定感の形成の一つとしての意味があると考えられる。

第1段階 (子ども自身の状態)

- 1 その場と子ども自身との関わり (その場が嬉しい ← 居たくない)
- 2 活動内容(動き)と子ども自身との関わり (動くことが楽しい面白い ← 動きが苦手、上手くできない)
- 3 他児と子ども自身との関わり役割 (仲間と一緒に ← 一緒にいや)

第2段階 (他との関係)

- 4 クラス集団と子ども自身との関わり (一員として、流れに乗って ← 自分なりに動く)
- 5 保育者と子ども自身との関わり (保育者と一緒に嬉しい ← 保育者の目が気になる)

第3段階 (多要因の関係)

- 1 活動内容-他児一本児 (同じようにできる ← 他児ができるが自分ではできない)
- 2 クラス集団-子ども間関係-本児 (共に見せたい ← 目立ちたくない)
- 3 保育者-活動内容-本児 (できることを保育者に認めてほしい ← 注意される、見られたくない)

第4段階（態度、目的意識）

- 1 身体部位の動きを意識して努力する（積極的に動かす ← やりたいようにする）
- 2 他児をよく見るようにする（人から学ぶ ← 自分の思いで）
- 3 待機時の態度に気を付ける（他の人への配慮、場の理解 ← 自分の在りのままで）

研究結果 II

研究IIにおいては、リズム活動を通しての子どもの育ちに関して、保育者の指導の在り方（保育者との関係と子どもへの効果）、活動種目への取り組みと生活や遊び行動との関連性を中心に検討する。

1 計画設定活動の実際（リズム活動）

原則として、毎週1. 2回 園の全体活動として実施（時間 10分～20分）

自由な遊びの後、クラス活動の前後に4月は年中、年長クラスのみで、5月から年少組も参加し、学年ごとに、種目によってクラス全員またはグループ別（5, 6名）ピアノの音楽に合わせてリズム運動を行う。動きの順序、長さは保育者が子どもの状態に合わせて調節すると共に、クラス担任が参加の仕方を調節する。

指導上の配慮（昨年の反省を踏まえて）

（1）実施時間について

指導計画においてはおよその活動計画を立てているが、毎週子どもの状態によってリズム活動の設定の仕方を勘案し、その日の活動状態によって集合時間は柔軟にし、活動時間も20～30分を目安とするが子どもの集中の仕方に合わせて行う。

積極的実施の場合

- 1) 学期の中間等、子ども同士の関係が深まり体を動かす活発な遊びが行われ、身体活動が活性化される時期。一つ一つの動きに挑戦的になり、意欲をもって参加しやすい。
- 2) 個々の遊びが安定せず、子ども同士のつながりも弱い場合。早めに始め、ゆっくり進行して一緒に落ち着いて活動する時間とする。

消極的実施の場合

- 1) 園全体で、個々の遊びや室内の集団遊びが盛り上がっている場合。様子を見て全体でのリズム活動の設定は少なくする。
- 2) 遊びへの集中や、子ども同士の関係がクラス内で個人差があり、まとまりがない場合。昼食前などに短時間行って一体感を持つ時間などとする。
- 3) 園行事の練習などクラス一斉活動が多い時期は、一定期間リズム活動は行わない。

（2）リズム活動場面の設定

年長児、年中児、年少児が対面で活動場面を取り雰囲気、全員が互いを見られるように設定。

年長、年中組は同時に動く子どもの数、グループの順序はほぼ一定にして子どもが自分の番を意識して自分から動けるように設定する。

並び方は、子どもの状態により、自由に任せる場合、保育者が決める場合とがある。年少組は、当初は大きい組の動きを見てから、保育者と一緒に全員参加で行う。

(3) 指導のねらいと方針

ねらい 1 自分でできる動きを楽しんでする。

2 自分の動きの感覚から自然に改善していく。繰り返しの中で自分でコツなどを習得する。

3 保育者の言葉かけ、体への援助を取り入れて改善していく。

方針

- ・練習の時間ではなく、楽しむ時間の雰囲気を作る。心地よく、友達と一緒に活動する。
- ・評価をせず、子ども自らの動きを受け入れ認める。
- ・保育者は言葉と動きを対応させ、子どもが自然に取り入れるようにする。それとなく動いて見せる。
- ・苦手なことが固定しないように、やり難い場合には補助的に援助し、自力でできるよう導く。
- ・集団の一体感をもって、一緒に動くことの楽しさを大事にし、組み合わせは、友達関係と発達状態の両者を勘案する。
- ・身体機能的特徴（体が硬い、腕の力が弱いなど）の個人差を受け入れながら、苦手な動きには丁寧に補助して徐々に伸ばしていく。

2 リズム活動内容（動きの種類）

A 個人活動

移動 〈スピード〉 走る。ギャロップ、スキップ

〈姿勢〉 つま先歩き、かかと歩き、

床運動 〈手足の運動〉 はいはい（腰高）、ワニ歩き（おなかを床に着けて這う）、かえる（両手をついて両足上げる）、かたつむり（手腹ばいで両手、両足を伸ばし、足の指で前進）、ボート漕ぎ（両足をそろえて両手で床を押して進む）

〈柔軟性〉 飛行機（床にお腹をつけ両手両足を上げる）、ブリッジ（体をそらす）、両生類

跳躍 片足跳び、蛙飛び、あひる、馬

回転 時計（両手を振り、そのあと回転）、ヘリコプター（手を広げて回転する）、側転

B 複数活動

2者 押し合い（二人で押し合う）

3者関係 3人の扇 ことり（二人の輪にことり）

3 子どもの活動状況経過

検討した側面（保育者間での評価）

- ① リズム活動状態 1 参加意欲（楽しい—回避的） 2 動きへの意欲（積極的—消極的）
3 技能（リズム感 移動 床 跳躍 回転） 4 参加態度（順番、交代等、待機時）等
- ② 保育者への対応（依存的—受容的—拒否的）
- ③ 友達関係（仲よし関係、グループ関係、リーダー的、孤立的）
- ④ 遊び（独創的、多様性、集中性、集団性）
- ⑤ 生活習慣その他（自立的—依存的）

個別の育ちの経過

表 3-1 Aタイプ

	遊び	友達関係	保育者関係	リズム (意欲 技能 態度)	生活その他
4 ・ 5 月	作りたいものがあってもはさみがうまく使えないために継続できないなど、練習が必要になる。新しい環境で気持ちが落ち着かず、遊びが安定せず、うろうろしたり、他児の中に無理に入ろうとトラブル。	他児の遊びに入りたい気持ちはあるが、誘われると入る。または無理に入ろうとしてトラブルことがある。	①と一緒に虫探しをすると嬉しく、その後で自分でさがして①に見せるなど、遊びの手がかりが保育者にある場合が多い。	リズムは楽しいという。一方で、思い通りに座れないと騒ぐ。走りながら他児にぶつかるなど、その場は楽しいが、自分なりに動いてしまう。	食事でおしゃべり、片付けを渋るなど、自分中心であるが。他児の着替えを見て自分からするなど、行動の手がかりとじている。
6 ・ 7 月	他児との遊びでは思いを言葉で十分出せないため揉めることが多い。大型積み木での遊びでは、他児が入るのを嫌って入れようとする子を止めることもありイメージの共有が難しい。	共にしやすい相手を好み、特定の子のそばが良くて無理に入り込んだりする。	保育者の指示や注意はその場で受け入れるが、自分から直そうとするところまでには至らない。	リズム活動は好んで参加する。 リズムの時ふざけて年少児をたたくなど、自分を出して自由に振舞う。 (動き方は注意しないで、危なくないように言葉を掛ける)	運動会や遠足など全体行動を伴う活動には意欲的でない。
9 ・ 10 月	遊具を独占する。他児を入れるのが難しい、一方で他児から誘われるのを待つ(ブロックをしながらも周りを見る)自分に合わせてくれる相手とは落ち着いて遊ぶ(粘土を見せ合う、滑り台を繰り返すなど)、その後は自分なりに長時間遊びこむこともある(粘土)。他との安定	ペースへの配慮がある子どもと一緒に場合は続く。積み木等思い通りにならないと当たり散らすこともあるが、自分の遊びができた時は、一緒に遊びたい子に断られても「後でしてね」と受け入れる。	①が折り紙などに誘い、他児も一緒に遊ぶ場を作ると安定する。 ①の働きかけに依存する傾向がある。まだ、助言があっても自分からは他を入れない時もある。	リズムは楽しくなるが、自分の気持ちで動くため他児にぶつかるなど。周りへの気配りまで行かない。 一つ一つの種目への気持ちが定まらない。 (動きへの指導は控える)	劇の練習など自分の役の言葉を覚えて頑張ろうとする面と、自分がやりたい役でないことから、気持ちが乗らないところがある。

	した遊びから自分の遊びへ				
11 ・ 12 月	製作で自分なりに材料を工夫した作り上げる(弓矢作り)跳び箱は怖いと言いつつ、やってみると楽しいという。仲良しが休みでも、楽しそうな他の子の砂遊びに入り一緒に盛り上がる。	砂場、縄跳びなど一緒にやってもらい、褒められると嬉しそうに続ける。忘れ物をして落ち込んでいると寄り添ってくれる子どもがでる。	①の説明をよく聞くようになる。	久しぶりにリズムをやると「やりたかった」という。側転がそれらしくできるようになり(これまでは蛙飛び)元気に動く。	

表3-2 Bタイプ

	遊び	友達関係	保育者関係	リズム (意欲 時能 態度)	その他
4 ・ 5 月	新しい教材(絵具等)に興味を持つ。個人活動に意欲的になると、集団遊びに入りやすい。 新しい活動や遊びが展開する(リボン作り→クイズ→望遠鏡作り)場合、他児も加わって持ち上がる。	2人遊びは遊びが続くが、他児が加わることが難しい(ブロックなど)。自分なりにやりたいこと(虫取り)は単独でやる。	①と他児とのかかわりに割り込むなど気を惹く。遊びへの参加への①の助言はその場では受け入れ難い。	種目によって意欲の違いが出る(カメ、側転など自分でできかけている時は頑張る)また、他児の動きに合わせて、動きが早くなる。遊びで友達がいない時リズムへの意欲がない傾向がある。	保育者の指導は直接受け入れられないこともあるが、他の子が理解して表現しながら共有されていく過程がある。
6 ・ 7 月	仲よしの子との遊びへの意欲は出て、他児とドレスで遊ぶ、一緒にダンスをするなど。 ①の援助を貰いながら遊びを広げる。気に入ったキャラクター作りから財布お金作りへ。おみくじを作って他児にひいてもらう等。	2人ではよく遊べて、3人で遊び始めても、一人を無視したりすることがある。	遊びでは保育者の助言や援助を素直に受けるが、行動への注意は受け入れられない時がある。自分なりの言い分がある。	運動会で苦手意識からスキップの意識から①の助けで動くななど。自分のやり方から、より適切な動きへの意識が出る。(手を添える横で動くななど、体の動かし方やその感覚を体感するようにかかわる)	リズムの動きに変化があるときは、遊びの中で独りで繰り返したり、家でもやったりする。

9 ・ 10 月	牛乳パックでの製作、図鑑を見て描画など一人で丁寧に組み組む（以前は①に助けを求めることも）。朝元気がなさそうでも、ままごとなどをしながら元気になり、年長児の遊びに関心を持つなど。自分のしたい遊びを「お店やごっこしよう」など誘う。大型積み木でのごっこは数人が出入りして継続。一人縄跳びに長時間挑戦も。	友達との遊びで、やめたいときは「やめなね」という。仲良しは休んでも他の子どもと遊ぶ。仲良しができると動きや話が活発になり、ブロック、野球、化石探しへと遊びが展開。	時に①の話を聞かずに、仲良しとおしゃべりする。みんなに言ってというと黙る。保育者への意識が強い場合と距離を置きたいときとが見られる。	ウサギのジャンプを仲良しと笑い合いながら楽しく跳ぶなど楽しく動く。両生類で片足が動かず①の手をかけて動かしたり、側転では足が上がるようになるなど変化の時期。リズムでは「ことりがしたい」などいう。遊びの中に、なべなべ、などが入る。	
11 ・ 12 月	大縄跳びを自分達でしたいと工夫するがうまくいかず①に回してもらおう。ポケモンハウス製作など仲間遊びの中でオリジナルに工夫して打ち込む。また、鉄棒の逆上がり、縄跳び練習など一人で持続して成果を実感する。	自分がやりたい遊びを仲良しがやらない場合、①が他児の気持ちを伝え理解はしても、折り合いが難しい。苦手な活動（縄跳び、鉄棒等）も仲良しがやっているとやろうとして慣れる。	砂遊びのご馳走を①に振舞う。自分でできないことを①に助けを求め、その後「できた！」と満足。保育者の助言や介入の意味が理解できてくる。	芝生で連続側転の練習をして足が伸びるようになる。リズムの動きが遊びの中で繰り返されるなど、展開している。気持ちが落ち込んでいる時に、リズムでできるようになった動きを思い切りやった後元気になることがある。	遊びに打ちこむようになって食事が進み嫌いな食べ物も食べられる。集団の中でも自分なりに、一人遊びも周りを気にせずできるようになってきている。

表 3-3 C タイプ

	遊び	友達関係	保育者関係	リズム (意欲 時能 態度)	その他
4 ・ 5 月	年長児の椅子取り、かるたゲームなどルールを理解して加わって楽しむ。他児のポケモン遊び	自分が作りたいものを明日に伸ばして、他児のカードゲームに入る。	①の挨拶に応じて大きな声で挨拶する。ドレス作りで①に助けを求めながら作る。	リズムは楽しそうに動く。自分で動き方の調節をすることがある。リズム活動の後で勢いよく、縄跳	食事が進むようになるなど全体的に新年への意欲が強い。

	から、独自にポケモンの仲間を作るなど、遊びを広げる。			びを始めて元気よく跳ぶなど連続性が見られる。	
6 ・ 7 月	ごっこ遊びが盛んになり、ドレスやお面をつけて、動きまわって遊ぶ。ドレス作りは関心を持つ子が集まるが、他児が同じように作ると、嫌になり独自にしたい。できるとすぐ着て側転などしたががる。ランドセル作りから、ノート、鉛筆作りへと発展する。作業丁寧になる。	他児が遊びに加わることで、会話ができ、楽しそうな面と、自分の思うようにできない気持ちからの小さないざこざがある。	製作の材料や方法などは①に相談する。 ①の助言をよく聞いて活動する。	リズムは、個人活動よりも誰かとする動きの時に楽しそうにする。 手足をしっかりと動かす種目にはあまり興味を持たず、表面的に動くところがある。 (自分なりの地道な努力を大事にした)	保育者の指導や助言を参考にして遊びを發展させているが、保育者の意向を気にすることもあり、まず自分で考えたり、自分たちでやりたいように見守るようにする。
9 ・ 10 月	園庭で場所を作ってままごとをする、他クラスの担任の許可を得るなど、自分の思いで自発的に行動する。猫ごっこなど数人で楽しく継続して遊ぶ。 ごっこ遊びの中にルールを決めて共有して遊ぶ。	集会、リズム、食事など一緒にいる子どもが決まってくる。ブロック遊びなど新メンバーが入りたがる時揉めるが、入って後で盛り上がる。	①と一緒に園庭の草むしりをして、土から出た石をお宝と言って集めるなど、きっかけをもらって自分の遊びにしている。	リズムが楽しくなると、他児に教えたり、遅れがちの子をリードする様子。 リズム遊びごっこをする(数人で並んで、動きを決めて自分の声でリズムの曲をうたう)ピアノカを、楽譜を作って練習し、吹けるようになると、トンボの曲を吹いて他児に動いてもらう。	
11 ・ 12 月	遊びの中でクリスマスの劇やリズム活動の動きをすることが増える。年長児の役割をセリフも覚えて	仲間関係が緩やかになって、遊びのメンバーが流動的になる。相手の状態や思いを考えるようになる。	保育者の意図を理解するようになり、注意ややり方を手がかりにするようになる。必要なことは保	リズムの動きの一つ一つが自分なりにできるようになり、それを遊びの中で再現しようとする積極的	

<p>自分達で交代してやったり、物をそれらしく作ったりする。じゃんけん列車、ことり、なべなべなどを變形しながら入れ替わりで楽しむ。歌を口ずさむ。自分の製作は休み後も連続する。ピアニカが上手になり、クラスの誕生会で吹く。</p>	<p>り、一緒にやれる方法を考えたり、相手を励ます等融和的になる。</p>	<p>育者に頼み、自分達でできることは自分で、と自立的になってくる。</p>	<p>な取り組みが見られる。(リズムが楽しいこともあるが、手近な遊びにならないように、動きを洗練、特に床運動をすることへの関心、遊びではオリジナルな興味の発見や環境への関心も大事にする。)</p>	
---	---------------------------------------	--	--	--

研究Ⅱの考察

4歳児期の子どもの育ちとリズム活動の役割について考察する。

この時期は自分のやりたいことを意識し、自分のやり方に関しては周囲の物や人も視野に入れるようになる。自分の思いは複雑になるので、その子どもやりたいことや友達の好みなどの思いと、行動への表し方への保育者の気づきが重要になる。事例において、子どもたちは、自分の思いの実現と周りの人間関係や物的現実、生活のルールなどの制約との調和をはかる努力をしているが、Cタイプはほぼ学年当初から、Bタイプは1学期後半から、Aタイプは、学年後半になって安定する状態であった。

いずれも、自分の好きな遊びが仲良しの友達と安定して持続する、さらに他の子どもの参加、または他への合流、或いは他のテーマへの発展と、拡張変化過程の体験を経て、園の生活習慣、集団活動も自分のこととする積極的態となる。子ども自身の世界が広がることで、他者の受け入れへとみられる。

遊べない、よくできないなどの状態において、一般的なルールや他者との関係を優先せずに、その子における問題として解決の手がかりを共に見つけることで、子ども自身が解決へ向かう。

身体活動は子どもの自己実現の基であることから、「動ける、やれる、できる」実感となるので、動く楽しさや、動く可能性の拡大の体験は自己肯定感の中核になる。

自ら育つ力の実感として、自発的な遊びのなかで必要に応じて自然に訓練されていくことが望ましい。リズム活動が子どもにとって、友達や保育者と一緒に楽しむ場となって、そこで、忍耐強く手足を動かす体験が、他の運動遊び、縄跳び、跳び箱等についても正しいやり方で、粘り強く取り組む姿勢と繋がる。

4 研究成果と課題

今後の保育への示唆は以下のようなものである。

1 保育者の計画的設定活動は、日常的繰り返しの活動と短期的特殊な活動（行事等）とがある。そこでの子どもの学び方、状況は異なるが、子どもの取り組み方は相互に関連している。

本研究事例では、前者は自己を発展させながら、後者は環境や他者と相互作用しながらであるが、い

いずれも子ども自らが興味関心、意欲を持つこと、子ども同士が繋がることが基盤となる。いずれかの場面での積極的意欲的な活動体験が、他方での活動を支えており、子どもの状態を理解した助言が必要である。

2 子ども資質・個性により育ちの過程は異なり、遊びにおいても設定活動においても、子どもは自らの状態に合わせて参加、行動、かかわり方を選択調整している様相が捉えられた。自らの調節への援助の姿勢をもって保育者がかかわる事で、子どもの保育者の受容、保育者との信頼関係が深まるとみられる。4歳児期においては、時間がかかるので、急がずに、変化の兆しがある場合に支えることで、子ども自身が自分で進む感覚を持つとみられる。

3 設定活動体験の遊びへの効果としては、作られた状況から遊びのイメージの広がり、他者への配慮、物の扱いなどが生まれる間接的な影響と、保育者からの積極的な提案による活動内容を自分たちの遊びとして行って習得するなどの直接的影響がある。相互に連動しながら子どもの総合的な育ちになっていると考えられる。

4 子ども自身に内在する成長への志向（できるように、わかるようになりたい）が、人と繋がる意識（仲間と一緒にしたい、仲間に受け入れられたい、同じようにやりたい）とつながっていることから、4歳児においては、保育者がその助言者、仲介役を果たす、またはその相手としての協働者となることで保育者との信頼関係を形成する。

5 年長組においては、子どもは集団目的への適応に敏感になるので、その前段階として年中組では、自己活動力の自信と自他の関係の安定性の確立が必要になる。リズム活動の場面は自由な遊びを補う活動場面としての機能を持つものと考えられる。その活動の生かし方を今後の課題としたい。

参考図書

- 津守 眞 著 「保育の体験と思索」 大日本図書 1980
菊池ふじの監修「倉橋惣三「保育法」講義録“保育の原点を探る”フレーベル館 1990
佐藤 学 他 「変貌する子どもの関係」 岩波書店 2016
無藤 隆 著 「共同するからだとは、幼児の相互交渉の質的分析」 金子書房 2019
河合隼雄 他 「声の力・歌・語り・子ども」 岩波書店（岩波現代文庫） 2019

共同研究者

（代表） 松田 彌生
藤本 玲未
小川 真理
星 由起子